

第 5 回 VTS 勉強会@東京 報告レポート

はじめに

首都圏に在住する VTS の受講生が、ファシリテーターとしての経験を積み、問題点や疑問点を共有するために定期的に勉強会を開催している。ここでは、2012 年 3 月 7 日に行われた第 5 回勉強会を報告する。



日時：2012 年 3 月 7 日（水） 19：00～

会場：アーツ千代田 3331 会議室（東京都千代田区）

参加者：6 名

内容：1．3 作品からなるシークエンスを使った VTS の実践（2 名）

2．メンバー全員での振り返り

1・ファシリテーターによる実践記録

[ファシリテーター]

シークエンスのテーマ

人と自然、日々の暮らしの営み

同時代（19 世紀中頃）で影響し合った画家の作品

VTS 対象設定

美術館に普段なじみの無い客層で、自分の意思ではなく、たまたま来た、連れてこられた、というアプローチでの来場者。年齢は高校生以上～。

選んだ作品が対象にとって妥当だと考えた理由

日本人にとってはなじみがあり ある程度の一般的な作品に対する前提知識はあるものを選んだ。（教科書など、触れる機会があるレベル）

入り口はなじみがあることで、入りやすく、しかし、背景にある要素や書かれている人物に関しては改めて鑑賞した時に、初めてその背景までじっくり鑑賞できるような、美術鑑賞に対して導入的には優しいレベルである作品と考え選んだ。

年齢に関しては、美術の知識は必要ないが、描かれている時代や国などが少し分かる（分かり始める）年代ということで、高校生以上とした。

歌川広重(初代)

(東海道五十三次・掛川) (隸書版)

21.5×34.5cm 江戸時代 19世紀中頃

木版画 サントリー美術館蔵

ジャン＝フランソワ・ミレー

(落穂拾い、夏 Des Glaneuses)

38.3cm×29.3cm 1853年

キャンバスに油彩 山梨県立美術館蔵

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(種まく人)

64×80.5cm 1888年

キャンバスに油彩 クレラー＝ミュラー美術館蔵

実践後の所感

今回は自発的に美術館を訪れない層への入門的なVTSになればと思い組み立てた。作品の描かれ方は異なるものの、3作品を通して人物や背景に関して同じキーワードが出てくる作品を取り上げ、シンプルで分かりやすいシークエンスを心がけた。

ファシリテートはリンキングが課題。

鑑賞者からキーワードに関連した発見が多く発言として出たが、中立性を保ちつつ、「1 作品目に出た意見は～」と前の作品で挙がった意見をより積極的に使い、その場に出てきた意見を効果的に活用できるよう工夫していきたい。

[ファシリテーター]

シークエンスのテーマ

風景画と感じられる絵画かつ画面の外にも広がりを感じる作品。

(裏テーマ/この世とあの世の境界)

VTS対象設定

VTSには参加したことがなくても、美術史・美術の知識を持った成人。ただし、知識と作品中の表現そのものを結びつけるのがあまり得意でない人たち。

シークエンス

- 1) 具象の風景画だが、抽象的な表現要素も持ち、心象風景も感じられる作品
- 2) 具象の風景画だが、意匠性に富み、静・動や心象風景も感じられる作品
- 3) 作家は特定のものを描いていない抽象作品だが、風景・心象風景を感じられる作品

長谷川等伯 (松林図屏風) (右隻)

紙本墨画、六曲一双屏風

156.8×356.0cm

16世紀(安土桃山時代)

東京国立博物館蔵 国宝

小泉淳作 (涛声 男鹿半島入道岬)
顔料・紙、六曲一双屏風
170.0 × 373.0cm
1997年
東京オペラシティアートギャラリー蔵

マーク・ロスコ (Red on Maroon) (シーグラム壁画No.4)
油彩・キャンヴァス
266.5 × 239.0cm
1958年
ロンドン、テイト・ギャラリー蔵

実践後の所感

個人的にはぎこちない流れの実践になってしまったと感じている。先日、アドバイスされた「1人VTS」がまだまだ不足していたと反省。鑑賞者の発言をパラフレーズする際に、きちんとその人の本意を読み取ることを心がけ、時折、鑑賞者に確認しながら行ったものの不十分と感じた。また、発話者の真意をつかみ切れず、適切でない結句を使用したことも多く、これは課題の1つと考える。

今回のシークエンスは、近々行う勉強会の参加者を想定して組んだもの。本日の実践では、鑑賞者が持っている美術史の知識と見たことをリンクさせた意見が出てきたのだが、対象に設定した人たちを前にして行う場合、どのような鑑賞の場になるのかという不安も残る。同時に深度のある鑑賞とは何か、そのためにファシリテーターができることは何かという点がまだつかめない。

2・振り返りについて

7人のメンバーで行っている勉強会も5回目となり、ファシリテーターとしての実践も2順目を迎えることになった。実践を行った二人は初回での問題点を明確に把握して、新たな目標を立てて今回の実践に取り組んでいたことが感じられた。鑑賞者がシークエンスの意図を推察しやすい組合せだったせいも、シークエンス内で別の作品とリンクした発言や、シークエンスを越えて別の実践者の時にあった作品とリンクした発言が出たりすることもあった。一つの作品を見るのではなく、シークエンスという一連の作品を鑑賞することの効果を感じられた勉強会になったように思う。

< 振り返りの中で話題となった主なテーマ >

● 最善の環境を作る

鑑賞の会場を設営する際には、与えられた条件の中で鑑賞に適した最善の環境を整えておくことが確認された。プロジェクタを使う場合、画像を鮮明に写しだすために2MB以上、あるいは解像度 350dpi 以上 (印刷用レベル) のものを用意した方がよいという提案があった。また、画像を操作する PC 画面を鑑賞者に向けないといった注意も必要である。

● リンキングと中立性

実践者から、作品を越えてリンクिंगをすることはファシリテーターの恣意的な行為となり、中立性に反するのではないかという発言があった。シークエンスを組んで一連の作品を鑑賞する場合は、たとえ違う作品であっても過去に出てきた発言を結びつけることこそがファシリテーターの役割である。そのため、リンクすることと中立性とは矛盾するも

のではないと確認しあった。

● 気づいてくださいました / 感じてくださいました

鑑賞者の発言をファシリテートする際に、「～～に気づいてくださいました」とまとめることがある。鑑賞者が子どもの場合は、有効な言葉かもしれないが、大人の鑑賞者の場合は、「ファシリテーターだけが知っている正解を見つけてくれた」というようなニュアンスが感じられて違和感がある。また、「～～感じてくださいました」という場合では、作品を離れて漠然とした印象を話しているようにも聞きとることが出来る。発話者の真意に合う適切な結句の選択が必要になることを確認した。

<まとめ方で多用される結句例>

・気づいた / 発見した

より what's going on の対応に近いが正解へと導くような誤解を招く

・思った / 感じた

感想的

・想像した

感想・連想的

・考えた

分析的

対話型に慣れていない鑑賞者の場合は、とりあえず発言をしてもらうことが重要なため、「～～感じてくださいました」と一旦受け取り、その後で「～～それはどこからそう思いましたか」という二つ目の質問をすることで作品に戻ることを促したらよいということが確認された。

● 腹八分目の効果

一つの作品のセッションを終了する際は、鑑賞者の発言が出尽くすまで待つよりも淡々と終了させた方が良い。特に大人の鑑賞者の場合は、もっと見たいという余韻を残して終わらせた方が、自らの学びに役立つのではないかと話し合った。

おわりに

今回は、振り返りの時に共有できた作品やシークエンスに関する情報が多かったため、実践者のシークエンスの意図まで確認しながら振り返りを行うことが出来た。また、メンバー以外の参加者からのアドバイスがあったことで全体にまとまりのある勉強会になったように思う。初回の勉強会と比較して考えてみると、徐々に振り返りの時間の充実度が増してきており、日頃それぞれの分野で活動しているメンバーにとって、刺激ある勉強会になっていることが感じられる。今後もこの勉強会を定例会として継続していくが、どのように展開していくのか楽しみである。